

嘘

藤堂志津子



嘘



幻冬舍

〈著者紹介〉

藤堂志津子 1949年、北海道生まれ。87年、「マドンナのごとく」(講談社)で北海道新聞文学賞受賞。88年「熟れてゆく夏」(文藝春秋)で第100回直木賞受賞。近著に『海の時計』(講談社)『ぬばたま』(日本経済新聞社)などがある。札幌市在住。

嘘

1997年6月11日 第1刷発行

著 者 藤堂志津子

発行者 見城 徹

発行所 株式会社 幻冬舎

〒160 東京都新宿区四谷1-22-6

電話:03(5379)8011(編集)

03(5379)8086(営業)

振替:00120-8-767643

印刷・製本所:図書印刷株式会社

検印廃止

万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担でお取替致します。小社宛にお送り下さい。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。定価はカバーに表示しております。

©SHIZUKO TODO, GENTOSHA 1997

Printed in Japan

ISBN4-87728-166-5 C0093

噓

写真 装帧
荻原宏美 加藤光太郎

I

1

走りだしたバスの窓から青空が見えた。

一月の寒さを感じさせない、その表面がほんのりと湯気にぬくもっているような、のどかな色あいの青さだった。

丸味をおびた細長い雲が、おもちゃの貨物列車を思わせる形で、どこまでも途切れなくつづいている。

風はなく、貨物列車は動かない。

どこことなく幸せそうな雲だった。

ただ空の一点に停滞したまま、その安らぎと満足感と天空の陽さしをあびて、ついうっかり居眠りしてしまった雲。

何かに似ている。けれど何に似ているのか、相沢玉貴あいざわたまきはどうしても思い出せなかった。

やがてバスは、居眠りしている貨物列車の雲を置き去りにして、この街を東西に二分する川の

橋を渡りはじめた。

隣にすわっている里子^{さとこ}が、急にこほこほと咳^{せき}こみだし、しばらく苦しそうに肩をあえがせた。首に巻いたマフラーの先をハンカチがわりに口に当て、せめてそうやってまわりに迷惑をかけまいとしている。

まわりといつてもバスはがらあきだった。ずっと前方の席に毛糸の帽子をかぶった年配の男性がひとりいるだけで、他に乗客はいない。

西の郊外にむかうこの路線のバスに乗るのは、きょうで八回目をかぞえるけれど、いつの日も、行きも帰りも乗客はまばらだった。

里子の咳がようやくおさまったところで、玉貴は話しかけた。同時に膝^{ひざ}に置いたシュークリームの箱とリングの包みにまわした両腕に力をこめる。落としたら大変だ。

「大丈夫？ 里子さん。具合がよくないのじゃないの」

「ごめんなさいね」

里子は白っぽいプラスチック・フレームの眼鏡の奥の目を、いかにもすまなそうにしばいた。度入りのレンズではなく、単なるガラスのはめこまれた眼鏡だった。これをかけると里子は実際の年齢よりぐんと老^ふけて見える。もうじき二十一歳になる玉貴の母親と称しても、だれも疑わない。

眼鏡だけでなく、さらにそれらしく役になりきるため、先週と同じく里子はわざと着古したネズミ色の半コートと、よれた黒っぽいズボンをはいてきていた。髪も無造作にうしろで一本に束ねただけである。

生活の切り盛りにあけくれ、なりふりかまわずに今日にいたった主婦、というのが、今回の里子の役どころだった。勤勉で実直で、自分のことよりも夫や子供のためだけを考えて生きてきた家庭ひとすじの主婦。

その母親のもとで育った、まじめな女子大生の役が玉貴で、しかも家族思いの、やさしい娘でもあるのだ。

流行遅れのデザインの眼鏡をかけると、いたって目立たない、地味な、また、どこことなく陰気な四十代も後半の女性に変身する里子は、本当は三十八歳になったばかりだった。

「ごめんなさいね、きょうは」

里子はふたたび玉貴に詫^わびた。

「志摩ちゃんをつれてくる約束だったのに、風邪なんかひかせちゃって」

「風邪、はやっているからね」

「だから私がきちんと気をつけて、あの子にしつこくうがいさせたり、手を洗わせたりしなくちゃならなかったのに」

志摩は里子のじつの娘で、小学四年生になる。小柄なため、一年生か二年生といつわっても通
用し、それだけに貴重な「子役」だった。まだ年端もゆかない、いたいけな子供の外見と、年齢
相応の物おぼえのよさをあわせ持つ。

「お父さんにも叱られたの。健康管理も仕事の一環だ、母親のつとめだ。そういうことで仕事仲
間に迷惑をかけちゃいけないって」

里子は夫の望月三郎をお父さんと呼ぶ。彼もまた場合によっては玉貴とチームを組む。玉貴の
父になったり、上司を演じたり、二十歳近くも齡のはなれた夫を装ったりもする。

以前はJ Rの職員だった三郎は、転勤を命じられ、この街をはなれて単身赴任しなくてはなら
なくなった際に、J Rを退職した。

三郎と里子は夫婦そろって、とある新興宗教の信者で、その宗教の戒律で「家族はつねに一緒
に暮らすべし」と定められているのだという。だから三郎は戒律に従い、転勤の多い職場を辞め
た。

現在、三郎は玉貴の仕事に加わるかたわら、コンビニエンス・ストアで深夜専門のパートで働
いている。

「……でもねえ」

里子がため息まじりにつづけた。

「志摩ちゃんは最近こまかい嘘をつくの。こまかいものだから、私もまただまされちゃって。うがいにしてもそう。うがいをしていないのに、平気で、したって言うし、手を洗っていないのに、洗ったって言うし、その言い方が、ほんとに自然だね。自然だものだから、親の私まで信じちゃう。前はそんな子じゃなかったのに。やっぱ、この仕事をしていると、どんどん嘘が上手になってゆくのかなって……」

気弱さをにじませた尻すばみの口調に、玉貴はあわてて言い返す。

「そんなことないよ、里子さん。きつと志摩ちゃんは反抗期にさしかかって、それで、そんなふうに里子さんに反発してるだけだと思っな」

「だといいいけれど」

「そうだよ、ぜったいに。私にもおぼえがある。自分の嘘に大人がだまされるとね、そのぶんだけ自分がその大人よりぐんとマシな気になった。ただ、それだけのことで、深い意味なんてないの。大人ぶりたいだけ」

「……そう……少し安心した。だって私、嘘をつくような子供じゃなかったもので、志摩ちゃんの行動がよくわからなくて」

「いまだって里子さんは正直者だしね」

正直者なのは里子だけでなく、夫の三郎にしても同様だった。

だから、この夫婦と心おきなく仕事のチームを組めるのだ、と玉貴はつくづく思う。この二年間ずっと一緒にやってこられたのは、ふたりの裏表のない性格によるところが大きい。仲間同士で嘘をつきあったり、ごまかしあったりしていたなら、チーム・ワークなど育つはずがなかった。その一方で玉貴は正直すぎるこの夫婦を、心のすみで見くだしてもいた。

ぶきつちよで正直すぎるから、あんないかがわしい新興宗教にのめりこんだりするのだ。もっと世渡りがうまければ、宗教にすぎる必要もなかっただろう。

さらに言うなら、四十歳と三十八歳の、いわゆるいい大人になっていながら、娘のような齡頃の玉貴をリーダー格にしたこの仕事のやり方に、これまでいっぺんとして不満をあらわしたことがないのも、この夫婦の甲斐性かいじょうのなさを物語っている。

素直すぎるほど素直だった。

その素地に加えて、宗教的な奉仕の精神がからんでくるため、玉貴としては、これほどやりやすい相手はいない。

仕事の金銭上の見返りはあるにしても、望月夫婦はこれを「ひと助け」のひとつとして信じきつてもいる。

だから玉貴も何かにつけて、この殺し文句をふたりの前で口にした。

「結局は、ひと助けになっているんだよね、私たちの商売は。あってもなくてもいい仕事、でも、

あると必ず助かるひとびとがいる」

夫婦はそのたびに神妙に深々とうなづく。

その姿を見ると、玉貴はふたりを見くだしながらも、けっしてこのひとたちを裏切つてはならないと胆に銘じるのだった。

橋を渡つて西の郊外へと進むバスは、六つの停留所をあとにし、ようやく玉貴たちの目的地である「ハトヤマ総合病院前」に到着した。途中で二、三人の乗り降りがあったものの、乗客は相変わらず同じ顔ぶれの三人だけで、バスは毛糸の帽子の年配男性だけを乗せて走り去つていった。

2

病院は正方形の白い箱をいくつも重ねあげたような外観を持ち、いちばん高い壁面いっぱいには、金色の線で一羽の巨大な鳩が描かれていた。

正面玄関へつづく砂利道を歩きつつ、里子はまだ気に病んでいる様子で言った。

「志摩ちゃんがこなかったの、がっかりするんじゃないかしらね、瀬柳さんは」

「風邪なんだもの、仕方がないよ」

「信じてくれるかしら」

信じようと信じまいとどうでもいい、玉貴はそう思ったが口にはださなかった。

瀬柳京は三カ月前から、この病院に入院している。仕事の依頼は先々月からで、里子は彼女の娘に、玉貴は孫娘になりすまして、週に一回ずつ見舞ってほしいという注文だった。

土曜日の午後の入院病棟は、週日と違って見舞い客の姿が廊下や待ちあいコーナー、売店などのそこかしこに見受けられた。

エレベーターで三階に上がり、ドアが開くと正面はガラス張りのナース・ステーションとなっている。

瀬柳京の病室へゆく前に、玉貴と里子はトイレに寄り、それぞれの身じまいをととのえた。

トイレの鏡にうつっているのは、どこから見ても健康そのものの、紺色のタートルネックのセーターを着た女子大生の玉貴だった。きょうは口紅もつけていない。

けれどその頬は紅を刷いたように、うっすらと赤味をおび、頬だけでなく、顔全体が透明ワックスをかけたみたいに光っている。汗をかいたのではなく、化粧をしない素顔はいつもこうだった。化粧をして、顔のあちこちに何かを塗りつけたほうが、実年齢よりもいくつも齢上に見られる顔立ちとなる。

見事に丸い輪郭の顔だった。肉がついてそうなのではない。骨格そのものが丸かった。その丸顔に小づくりな目と鼻と唇が、あと数ミリずつ互いに近寄ったなら引きしまった顔つきにな

っただろう、という予感をいだかせて、あつさりとのつている。

きれい、とは生まれてから、いちどとして言われたためしはなかった。もちろん、美人、のひと言も、いつだって玉貴には無縁で通りすぎてゆく。可愛い、この台詞は二、三回耳にした。そのうちのひとは、十八歳ではじめてセックスした相手である。ベッドの上で裸でいたときに、相手がうわ言のように口走った言葉だから、まったく本気にはしていない。ベッドでの男たちは、どんな齒の浮くような台詞も平気で、見境なしに、こぼれる米粒みたいにポロポロと言う。あれはペニスが言わせている言葉だ。

角田悟も玉貴を、可愛い、と称してくれたひとりだったが、そこには色恋ははさまれてはいなかった。

「見ているだけで気持ちのいい顔ってあるんだよ。愛敬のある顔というのがね。相沢くんのは、まさしくそれだ」

三十七歳の角田は小太りで、童顔だけれど、それでもきっちり三十五歳以上に見えるという人物だった。

玉貴は彼を、社長、と呼んでいる。現在のこの仕事を玉貴に持ちかけ、出資し、金銭面のすべてを掌握しているのが角田だからである。さらに角田は言ってくれた。

「いいかい？ 美人顔というのは若いときだけの勝負で、すぐにオバサンになってしまう。しか

し、きみのような愛敬顔は、いくつになっても不思議な可愛さを保っている。これは強味だね。自慢してもいいことだよ」

角田の励ましを思い返しながら、玉貴はパーマつけないショート・ヘアに櫛くしを当てる。その横では里子が水洗いしたガラスの眼鏡をかけ直していた。

3

瀬柳京の病室は六人部屋だった。

偶然なのか、意図的なのか、六人の同室者は、六十七歳の瀬柳京をふくめて、すべて六十代でかためられていた。

「失礼いたします」

病室の開け放ったドアの前で、里子が慇懃いんぎんに腰をかがめて会釈えしゃくした。玉貴もそれにならう。通路をあいだに左右に三台ずつ置かれたベッドの、右側の窓際のそこに京はいる。

土曜日のきょう、入院病棟は見舞い客でにぎわっているというのに、この病室にはそれらしき気配もなく、先週の木曜日にきたときと同じく静まり返っていて、患者同士の会話も絶えていた。イヤホーンでテレビを観ている者、顔も見えないほどに布団を引きあげて寝入っている者、そ